

学術

スロヴェニアの首都リュブリアナで、今夏第14回国際美学学会が催された(9月1~5日)。巨大学会の常として、ほんの一部を覗いたにすぎないが、聴衆からの反響も考慮に入れて、三つの発表を取りあげたい。

まず佐々木健一氏の「自動詞の詩学」。「なす」となる。の対比は、すでに池上嘉彦氏に体系的な考察があるが、おそらくはこれをヒントに、佐々木氏は主体が「なす」のではなく結果として「なった」という創作観を洋の東西にまたがって検討した。「なせばなる」といった地口が聖書の「人企て、神用立つ」に対比される。これに即座に反応して哄笑する聴衆こそ少なかったものの、後の昼食の席で何を注文するか、となつて、「私ハ日本人デスカラ他動詞的決定——これに決める——ハイタシマセン、コレニ決ッタ、トイフ自動詞的決定ガ正シイノデス」といった珍妙な会話も交されるほどの「流行」を見せた。

もっとも日本のお役所作文では、この自動詞的言い廻しが責任逃れと表裏一体だ。「旅順港ガ占領セラレタ」という報道が、日本人の占領したという事実を隠し、それを「天祐」の働きに転嫁しかねない効果を発揮したことは、既にラフカディオ・ハーンに指摘もある(「永遠なる女性性について」1893)。intransitivityを強調することが「東洋美学」への居直りの逃避と「誤解」される場合も多い。岡倉天心、内村鑑三、新渡戸稲造らの「外向き」の英語での日本説明に見られる「歪曲」も、彼らの主體的作為というより受け手に合わせた、というintransitivityの現れとは言えまいか。

この問題を「エンジニアリング」の観点から捉え直したのが室井尚氏の「世界美術の諸問題」という壮大な問題提起である。電脳機器を比喩(以上のパラダイム)として取り上げる室井は、支配的なO.S.(オペレーティング・システム)と互換性のないソフトは市場流通網から疎外され、淘汰されるという現象を援用して国際美術市場を支配する法則を分析する。佐々木がintransitivityと呼んだ現象も、室井に言わ

連載①  
自動詞美学は主要OSへの代替的抵抗となりうるか  
ニューヨーク通信・象牙の塔の言語覇権とその外部

1998  
10、  
10、

自動詞  
ASに

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教授

稲賀繁美  
Inaga Shigemasa

せればドミナントなO.S.を我がものできない被支配的立場にある弱者が、自らの置かれた力関係に無自覚であることの証拠でしかない。

基調講演者の一人で「全体主義芸術」について大著のあるボリス・グロイスは、今日では芸術家はもはや美術市場原理の生産者ではなくそのポトラッチ状況下での消費者にすぎないと喝破(カッパ)した。だがそうだとすると美学者に残る仕事は、グローバル・マーケットで理想的な——あるいは最悪の——消費者たるにはいかにもふるまうべきかを指南するビジネス・コンサルティング=消費者モニター業となるのではないか。

グローバルな市場を所与の前提と見なすこの、グロイスにも猛然とかみついた室井が主要なO.S.として想定しているのは、他ならぬ国際学会通用言語としてのアメリカ英語だ。支配的政治権力は他動詞的であり被支配者は自動詞的となる。中国の場合でも無為を説く老荘思想は、現実の政治原理——儒教的修身齊家治國平天下——から敗北し隠遁する文人の intransitiveな理念だった。

室井は一方で国際情報市場での米語覇権の帝国主義を糾弾し、他方でこうしたグローバル・ネットワークからの落ちこぼれに希望を託す。そんな政治的「希望の原理」をあえて中欧の知識人に向けて発したのは、中欧を米支配から離脱させ、非グローバル系の抵抗運動へと回収するためのオルグなのか。三年後の東京大会で室井の言説が遂行的予言として表現されるか否か、これは見物と言っよい。

リュブリアナの学会は9月初旬開催となった為、地球市場支配者のはずの米国人学者はいたって少なかった(東海岸は新学期)。そして米国本土でも学者米語は大学キャンパス上層の孤立した浮き島で、「反インテリク」(フレデリック・ジェームソン) 雰囲気溢れる海面下にはスペイン語とイタリア語とアラビア語、中国語・韓国語世界が錯綜して息づいている。それが実態だとすれば、室井脱もいささかドンキホーテ的にも映るのではなかるうか。

思

考

の

隔

景